

## 最優秀賞

【学校運営】

# 学校の意識改革を通じた 「チーム担任制」の実現

～全学年単学級の小規模校での複数学年教科担任・  
複数担任制の取組～

兵庫県稲美町立加古小学校

よしだ ひろあき  
吉田 博明



## 1 | はじめに

5,897人。これは文部科学省が公表している令和3年度の公立学校教職員における病気休職者数である。令和2年度と比べて694人増加している<sup>1</sup>。また精神疾患を理由に退職した公立小中学校教員は848人で過去最多となっている<sup>2</sup>。

これらの精神疾患などによる病気休職者数が高水準で推移している背景について、教員勤務実態調査やTALIS（OECD国際教員指導環境調査）では、社会や保護者等からの学校への要請の多様化や、学校現場を取り巻く環境の複雑化・困難化、さまざまな教育課題への対応等を背景とした教員の負担の増加が大きな課題となっている<sup>3</sup>、としている。

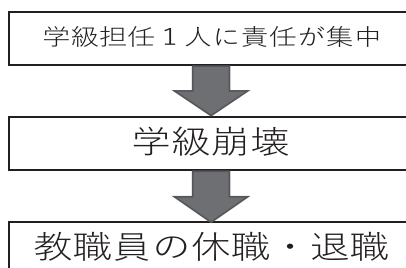
「学級運営等の在り方についての調査研究」報告書<sup>4</sup>では、「学級がうまく機能しない状態」<sup>5</sup>（いわゆる学級崩壊）をもたらす直接的な要因が挙げられている。

### ●「学級がうまく機能しない状態」の直接的な要因

- ①子どもの集団生活や人間関係の未熟さの問題
- ②特別な教育的配慮や支援を必要とする子どもへの対応の問題
- ③学級担任の指導力不足の問題

先述のような状況の中、これらの要因がさらに

深刻化して学級崩壊に陥り、その結果、病気休職者や退職者の増加につながっているのではないかと。教員の業務の特徴として、学級担任など個人で対応するケースが多く、1人で抱え込みやすい性質があることが指摘されている<sup>3</sup>。これまでのような、学級担任1人に責任が集中する学級担任制のシステムでは、この状況に対応できなくなってきたのではないかと。



今こそ問題意識をもって指導体制を見直し、学級担任にかかるその負担を「チーム」として支え合うときである。

以下では、本当の「チームとしての学校」をつくるために、本校で導入した「全学年単学級の小規模校での複数学年教科担任・複数担任制（チーム担任制）」の取組について紹介する。

## 2 | 「チーム担任制」に取り組む目的

本校は兵庫県の明石市と加古川市に挟まれた

稲美町にあり、全校児童165人、全学年単学級の6学級、特別支援学級3学級、合計9学級の小規模校である。

本町でも全国の流れと同様に、ベテラン教師の退職に伴い、若手教師や臨時講師の数が増加してきている。必然的に学級崩壊やさまざまな理由による教師の休職や退職につながる危険性が増えつつある。本校でも、これまでに何度も学級崩壊や荒れを経験してきた。学級崩壊や休職・退職によって、一番傷つくのはその学級の児童である。児童を守るために、何としても学級崩壊や教師の休職・退職を防がなければならない。

これまで、教師個人の努力で指導力を向上させることが求められる風潮だった。周りの教師もサポートに入るが、学級担任の高い壁があり、なかなか効果的なサポートが難しかった。それならば、1人の担任教師が、1年間特定の児童のみと関わりを続ける現状の学級担任制よりも、複数の教師が「チーム」となり、それぞれの強みを活かして児童に関わることができれば、この問題を解決することができるのではないか。それが、学級担任が交替していく「チーム担任制」に取り組もうと考えた理由である。

### 3 | 取組前に行った準備

令和4年度から全国で導入された高学年での教科担任制。児童の多面的な理解や教師の働き方改革に効果が期待されている。そこに、先の学級担任が交替するシステムを取り入れれば、教科担任制の効果だけでなく、学級崩壊を防ぐという効果も期待できるのではないか。それが「複数学年教科担任・複数担任制(チーム担任制)」である。

このシステムを導入するにあたり、先進校の丹波市立中央小学校、池田市立北豊島中学校を視察し、その取組を参考にした。

令和3年	1学期中に原案を教育委員会に説明、許可をもらう
	8月 夏季休業中に校内教職員研修 「チーム担任制」について、校長から概要を説明
	12月 教職員に、実施について賛否確認アンケート 賛成多数で実施を決定する 先進校(丹波市立中央小学校)を教職員で視察
令和4年	1月 タブレットを使つての保護者説明会(コロナ禍だったため、パワーポイントで実施) その後、質問・意見を受け付ける(3件)
	2月 児童説明会(タブレット)
	4月 取組開始

## 4 | 本校のチーム担任制のシステム

### (1) 4学級を五人の教師が交替で担任

本校のチーム担任制は、3～6年生までの4学年4学級を、5人の学級担任が交替で担任するシステムである。低学年でも学級崩壊の恐れがあるが、まずは高学年から取り組むことにした(令和5年度2学期からは、1、2年生でのチーム担任制にも取り組んでいる)。1年目は4学年4学級を4人の教師が、2年目は4学年4学級を5人の教師が交替で担任している。

図1のa週からe週を1週間ごとに交替するグ

1週間ごとに交替

	a週	b週	c週	d週	e週
3年	教師A	教師C	教師D	教師B	教師E
4年	教師B	教師A	教師C	教師E	教師D
5年	教師C	教師B	教師E	教師D	教師A
6年	教師D	教師E	教師A	教師C	教師B
サポート	教師E	教師D	教師B	教師A	教師C

図1 学級担任分担表

ループとし、AからEまでの5人の教師を3～6年生の学級担任に振り分ける。学級担任以外の週はサポートに回る。

### (2) 1週間で学級担任を交替

学級担任を交替する期間は、1週間とした。教師それぞれの強みを各学級に活かすためには、短い期間で交替するほうが効果的であると判断したからである。

先のaからeのグループが、年間計画の中の色分けされた週に学級担任をする。担任をもつ期間が、学期ごとにほぼ同程度の日数となるように調整した。現在2年目に入るが、特に違和感や困ったこともなく、これくらいがちょうどいいという声が、教員からも児童からも聞かれている。

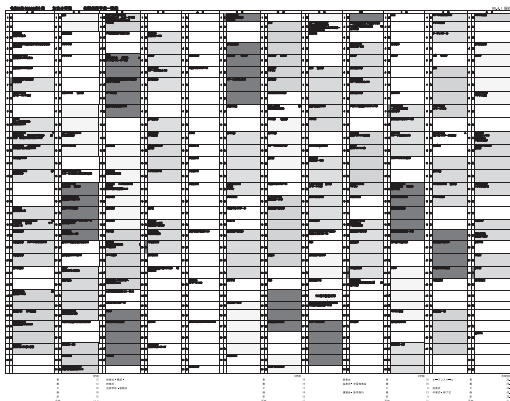


図2 学級担任(年間)分担表  
※図1のa週からe週を色分けで表示

### (3) 行事等の役割分担

大きな学校行事や個別懇談、参観日等の役割分担については、年度当初に決定した。教科と学校行事の関係(体育と運動会、音楽等と学習発表会)や、昨年度からの教師の校務分掌などを考慮して分担した。それぞれの得意な分野や取り組みたい分野を活かせるようにすることを基本に、それぞれが無理なく取り組めるよう、適材適所で役割分担をした。教師1人1人に強みがあり、また願いがあがる。それらが活かされるように調整した。

### (4) 「Tルーム」の設置

小規模校のため校舎も小さく、4学年が2つの階にまたがって配置されている。そこで、4学年の真ん中あたりに位置する教室を「Tルーム」として設置した。Tルームには、チーム担任教師の机を配置し、授業準備物等を置くことができるようにした。教師は、ここを拠点に各教室へ向かい、空き時間には教材研究や採点をするなど、時間を有効に活用している。

### (5) 担当教科の決定

本校でのチーム担任制は、教科担任制とセットのほうが効率的である。

1人の教師が同じ教科を担当する期間は、2～3年間を想定している。一定期間で交替することで、小学校教師として全教科を教える指導力を身に付けさせるためである。今年度は、4学年級の授業を主に5人の担任(A～E)と1人の専科(F)の6人の教師で分担している。教師ごとの授業の持ち時間が概ね同じになるように、担当教科を決定していった。また、担当する授業の比較的少ない教師が、1、2年生や特別支援学級の補助に入ることによって、学校全体の担任教師の負担を軽減できるように取り組んでいる(図3太字)。

教師	時間数	担当教科
A	22H	国4～6年(17H)・外3年(1H)
B	22H	算3～6年(20H)
C	20H	社3～6年(11H)・国3年(5H) +生補助1年(1H)
D	21H	体3～6年(11H)・外4～6年(5H)
E	20H	音(10H)・家(3.5H)・図3年(1.5H) +体補助5年(1H)
F	21H	理(11.5H)・図5、6年(3H) +体補助5年(2H)・図書2年(1H)
G	29H	図4年(1.5H)

図3 教科担当分担表

### (6) 教師間の情報共有の徹底

チーム担任制の導入にあたって、保護者から

「自分の子どもは、変化に対応するのが苦手なので、できるだけ混乱のないように、指導を統一してほしい」という要望があった。そこで、1年目は情報共有の場として毎週木曜日の放課後、チーム担任教師の打ち合わせ会をもち、その中で1週間の児童の様子や各学年の問題等について情報共有を行った。しかし、子どもたちの中から、「先生によって言うことが少しずつ違う」という意見が出てくるなど、課題も見られた。

その課題を解消するため、2年目はさらに細かく共有する事項をまとめ、それをチェック表にして毎週教師の確認事項として取り組んだ(図4)。その結果、2年目は、児童からの苦情が出ることはなくなった。このチェック表で確認することは、教師にとっても確認事項を振り返ることができる貴重な機会となった。

## 5 | 取組の成果

### (1) 学級崩壊の危険性の減少

大きな成果は、なんといっても各学級が安定していることである。本校がチーム担任制に取り組む理由は「学級崩壊から児童を守るため」だが、現在、3～6年生の学級の様子を見ても非常に安定し、学級崩壊する兆しは見えない。4学級に関わる5人の担任教師が同じ頻度で交替しながら学級担任として関わっているため、学級間での教師の指導力の差が生まれず、均質的な指導を提供することができているからだ。システムを変えるだけでこれだけ大きな効果が得られるのは、予想していた以上であった。

また、2年半が経過した時点で実施した児童および保護者を対象としたアンケート結果を見ると、1年目より肯定的な意見が10%以上増加し、どちらも約8割の肯定的な意見を得ている。1年目の反省を生かし、学校全体で「チーム」として

「学級チェックリスト」 ( )	学級名			
※次の①から⑳までのそれぞれについて、◎○△×でチェックをお願いします。(毎週、水曜日実施)	/	/	/	/
《朝》				
① 入室時やあいさつリレーなど、気持ちの良い挨拶ができていますか。【生徒指導：重点項目】【学校評価：努力目標】				
② タブレットの充電を忘れた場合は、教師に伝えて保管庫へ入れていますか。				
《生活》				
③ ハンカチ、ティッシュは持ってきていますか。				
④ 爪は切っていますか。				
⑤ 名札の着用はできていますか。【生徒指導：重点項目】				
⑥ 業間休み、晴れの日には全員外へ出ていますか。【学校評価：努力目標】				
⑦ 廊下は、中央線からはみ出さないように、二列まで歩いていますか。【生徒指導：重点項目】				
⑧ 自席を離れる場合、椅子を閉まっていますか。(休み時間、移動教室など)				
⑨ 敬語や正しい言葉遣いができていますか。【学校評価：努力目標】				
⑩ トイレのスリッパは、揃っていますか。				
《給食》				
⑪ お着の持ち方、配膳の仕方、食べ方など食事のマナーはできていますか。				
⑫ 時間内に食べることはできていますか。				
《掃除》				
⑬ 机や椅子を持ち上げて運んでいますか。				
⑭ 黙って掃除ができていますか。(もくもく清掃)				
⑮ 机の横には、図書バッグ、帽子、お箸袋をかけていますか。				
《整理整頓》				
⑯ 水筒は必ずロッカーに入れていますか。(ひもは巻いて入れる)				
⑰ 机の中の荷物、お道具箱等を整理して入れていますか。				
⑱ 椅子の背もたれに制服以外のものをかけていませんか。				
⑲ ロッカーの棚の上には、私物(児童)は置いていませんか。				
《下校》				
⑳ 教室で「さようなら」をしてから、運動場で「さようなら」をするまで、一言もしゃべらず移動できていますか。				
チェック者(担任) ⇒	サイン	サイン	サイン	サイン

図4 学級チェックリスト表

取り組み、改善していることが、少しずつ信頼を得、評価に現れていると考える。

また、今年度チーム担任に取り組んでいる教師を対象としたアンケート結果では、3～6年生の5人、1、2年生の2人の合計7人全員が、100%チーム担任制に肯定的な意見である。

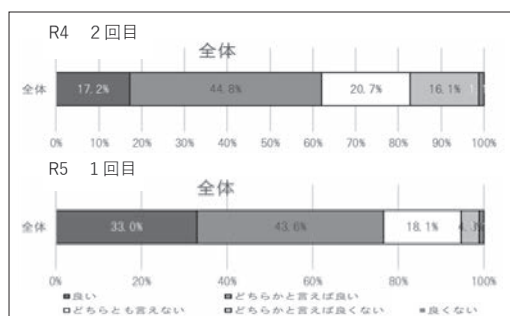


図5 保護者アンケート結果

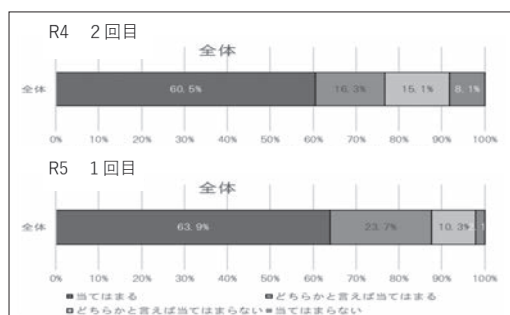


図6 児童アンケート結果

## (2) 児童にとってのメリット

教科担任が交替するだけでなく、学級担任が交替することで、より多くの目で児童をしっかり見守ることができている。多くの目は、多くの見方、考え方もいえる。さまざまな見取り(教師によって、良い面、悪い面の見取りが違う)ができることは、児童にとっても救いである。

担任教師が交替するということは、児童が自分に合う教師に出会える確率が増えるということでもある。特に聞かれた意見では、「同性の教師への相談がしやすくなった」ということがある。学級担任が固定される学級担任制では、担任教師を越えて他の教師に相談することは、保護者に

ととても児童にとっても、とてもハードルが高い。特に高学年女子の場合、これまで学級担任が男性教師だと相談しにくかったことも、同性の女性教師が担任のときに相談できることが増えたという。女子児童の生徒指導事案が発生したときも、「この女性教師なら相談できる」と指名され、素早い解決につなげることができた。

また、固定された学級担任ではないので、児童は、どの教師も自分の担任として、休み時間に気軽に相談をしたり一緒に遊んだりできるようになった。教師は、どの児童も自分の担任している児童として指導ができるようになり、教師にとっても児童にとっても、学級担任の壁がなくなるという効果があった。

## (3) 教師の負担の減少

### ①精神的負担の減少

1年目の4月当初、チーム担任の1人が、「4月当初の職員会議で、毎年、学級担任が決定した途端、すごいプレッシャーが襲ってくるが、今年は少しもプレッシャーを感じない」と話してくれた。「学級担任としての責任」を1人で背負うのではなく、チーム担任みんなで同じように責任を背負うからである。

これまで6年生の学級担任をしたことがない若手教師がいた。チーム担任制なら全教師が自然にサポートできる。1年目は、この若手教師に6年生の担任として修学旅行と卒業式を担当させることにした。実際に、さまざまな教師がサポートし、先輩教師の取組を見ながら自分の実践に活かしていく様子が見られ、無事卒業式を迎えることができた。

「来年度、指導が困難な学級を担任する教師が決まらない」という管理職の悩みを聞くことがある。これも学級担任1人に責任がひもづいているためである。しかし、チーム担任制になれば、その悩みも解決できる。何より、1人に責任を負わせることはない。「みんなで対応できる」心強さは、チーム担任の1人1人に勇気と力を与えてくれていると感じる。

チーム担任制では、各教師の強みは活かされるが、弱みの影響はほとんど分からないほど小さくなる。それは、自分の弱みが他の教師の強みで補完されるからである。自分の弱みは他の教師に任せ、自分の強みでみんなにお返しをする。それがチーム担任制の強みである。

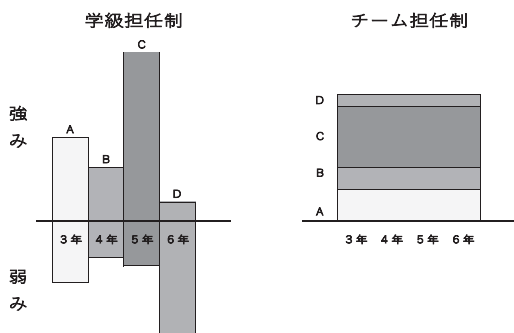


図7 学級担任制とチーム担任制の強みと弱みの違い

### ②業務量の減少（時間外勤務時間の減少）

チーム担任制を導入した令和4年度と（令和4年度は四人で4学級を担任した）、学級担任制だった令和3年度との時間外勤務時間を比較した結果、時間外勤務時間が大きく減少したことが分かった（図8）。チーム担任四人（A～D）の平均時間外勤務時間は、前年度から約62時間18分減少していた。一番多く減少した教師Bは、一年間で108時間42分であった。唯一、初めて6年生を担任し、4学年分の算数を担当した若手教師Cは、14時間18分のプラスとなった。

	A	B	C	D
令和3年度	458時間30分	488時間00分	488時間52分	270時間00分
令和4年度	390時間50分	379時間18分	503時間10分	182時間50分
差	-67時間40分	-108時間42分	+14時間18分	-87時間10分
(一年間) 平均約62時間18分減少				

図8 R3とR4の時間外勤務時間の差

しかしこのCの教師も、2年目となった今年度（令和5年度）は、9月末の時点で、昨年度同時期と比べて、すでに116時間4分と、驚くべき時

間の削減となっている（図9）。どの教師も、一番多かったときと比べて減少し、半年間で平均111時間14分減少となっている。これは毎日約1時間早く帰れているということである。

		A	B	C	D
令和3年度	4月～9月	211時間19分	203時間59分	226時間25分	145時間23分
	10月～3月	247時間11分	284時間01分	262時間27分	124時間37分
令和4年度	4月～9月	245時間30分	191時間19分	246時間11分	90時間10分
	10月～3月	145時間20分	187時間59分	256時間59分	92時間40分
令和5年度	4月～9月	144時間27分	141時間43分	130時間07分	77時間49分
一番多いときと令和5年度4月～9月との差		-102時間44分	-142時間18分	-132時間20分	-67時間34分
(半年間) 平均111時間14分減少					

図9 R3～R5の時間外勤務時間の差（9月現在）

時間外勤務時間を削減できている1つ目の理由は、教科担任制にすることにより、持ちコマ数が減少し空き時間ができたためである。その空き時間を効果的に活用し、テストの採点や教材研究等、授業準備の効率化に充てている。

2つ目の理由は、今年度は教師のメンバーがほとんど変わらなかったため、昨年度の教材研究をそのまま活かすことができているためである。また、学級担任をする児童もほとんど変わらないため、授業準備や児童理解にかかる時間が、昨年度から大幅に削減されていることが挙げられる。これは小規模校でチーム担任制を導入する大きなメリットである。

また3つ目の理由は、本当に必要な業務を精選することができたためである。「あれば良いが、なくても困らない」業務を、思い切って削減するからこそ余裕が生まれている。子育て世代の教師にとって、時間外勤務時間が少ないことは、子育てにかけける時間を確保できる大きなメリットである。どの教師も持ち帰り業務をしていないことは言うまでもない。

### ③学校行事や出張等への柔軟な対応

これまで、本校のような小規模校では、修学旅行や自然学校などの引率教員を、該当の学級担任以外は、管理職と養護教諭、そして専科教

員しか担当することができなかった。しかし、チーム担任制では、担当する授業の時間割を変更しておけば、誰でも引率することができる。学級担任が複数いることで、より効果的な支援をすることが可能になった。

また、時間割を変更すれば授業を自習にすることなく、出張に行ったり年休を取ったりすることもしやすくなった。昨年度1学期の個別懇談の際、体調不良で急に欠席した教師がいたが、懇談資料を教師間で共有していたため、サポートの教師が学級担任として懇談を担い、大きな問題や保護者からの苦情もなく終えることができた。

#### ④深く系統立てた、専門的な教材研究

「全教科教科担任制」によって、より専門的な授業ができる。教師からは「これまでの学級担任制では、どうしても国語や算数の教材研究に時間を取られ、他の教科にこれだけ時間をかけて、深い教材研究ができなかった。また3～6年生まで系統立てて理解することができ、非常に勉強になる」という声が聞かれた。

今年度の全国学力・学習状況調査の児童質問紙では、「国語の勉強は好きですか」と「国語の授業の内容はよく分かりますか」という質問に対し、本校児童の回答は、全国および県の回答と比較して「好き」や「よく分かる」が約2倍多かった。それぞれの教師が自分の得意な科目を担当しているからこそ、授業の準備や工夫に無理なく取り組めているように思う。実際に児童も楽しみ

にしているし、教師間でも授業を参観し、勉強になると感じているようだ。教科を絞って深い教材研究ができることは、精神的および時間的な業務が減少するだけでなく、より質の高い授業を可能にすることが分かる。

#### (4) 想定していなかった効果

##### ①本当に必要な業務の精選

これまで、小学校教師なら、いろいろな当番表などを、自分のクラス用にかわいいデザインにしたりきれいな色で飾ったりして、こだわることも多かった。

チーム担任制に取り組む中で、そういう「あればいいが、なくても困らない」業務を明らかにしていくことができた。先の分担表も3～6年生まで共通のデータ枠を使用することで、教師1人で作業をすることが可能となった。年度当初の貴重な時間を、本当に必要な業務に限定し分担することで、有効に使うことができるようになった。

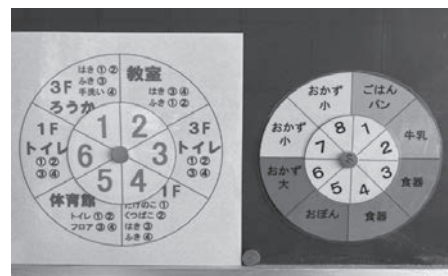


写真1 各当番表

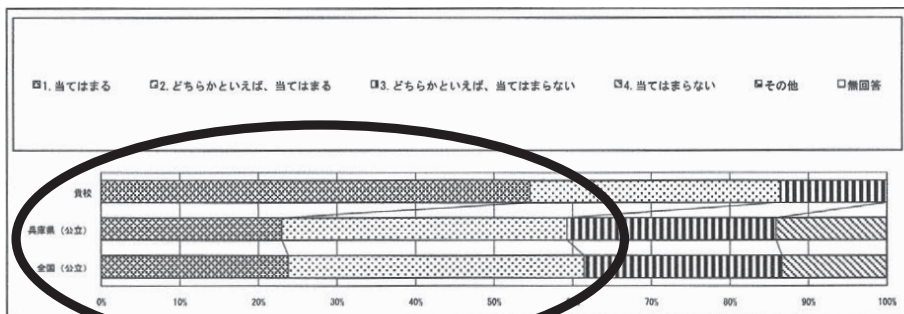


図10 全国学力・学習状況調査児童質問紙

## ②教師間のコミュニケーションの活性化

チーム担任の打ち合わせ会以外の普段の職員室でも、児童を話題にした教師同士の会話が aumentado と感じる。特に、児童の良い面を話題にした会話が aumentado。すべての教師が、学級担任として、同じ目線、同じ立場で児童1人1人のことを考えることができるからである。みんなの学級だから、みんなで良いことを共有し、一緒に喜ぶことができる。だから情報共有のための時間も、負担に感じることは少ないという。

## ③給食の残菜の減少

給食調理員に、チーム担任制を実施したことで何か変わったことはないか尋ねたとき、「給食の残菜がすごく減った。とても有り難い」と話してくれた。これは、児童が給食を食べるように上手に指導できる教師が関わることで、どの学級の児童も少しずつ食べる量が増え、結果、残菜が減っていったからである。

	ごはん	パン	主菜	副菜	残食なし
R3	20.46kg	32.5個	37.7kg		48日
R4	13.55kg	26.8個	34.05kg		68日

図11 R3とR4の残菜比較表

1年間の結果を見るとかなりの成果があった。これも、想定していなかった効果の好事例である。

## ④児童がつくる学校行事

学級担任が1週間で交替するチーム担任制。今までのような固定した学級担任がないため、児童の間には自ずと「自分たちで学級をつくる」という意識が芽生えている。特に大きな学校行事である自然学校や修学旅行、運動会などの取組で、大きな成果があった。

兵庫県では、全小学校5年生が4泊5日の自然学校を経験する。小学校の中では一大イベントである。自然の中で、さまざまな体験を行う自然学校。疲れや不注意のためケガも起こる。教師からの注意や指示も多くなりがちである。しかし、児童をじっくり観察してみると、予定の時刻

を守り、頑張っている。そこで、教師の間で、しおりに書いてあることについては改めて説明はせず、児童主体で活動するようにしようと考えた。教師がそう宣言し、「児童がつくる自然学校」が始まった。活動の指導は、現地のスタッフが行ってくれる。教師は児童の安全等を見守ることに徹した。それからは、学校での帰校式まで、引率教師が指示を与えることは一度もなく終えることができた。児童の1人に「なぜ、自分たちだけでできるの?」と聞くと、「全部しおりに書いてあるから」と答えてくれた。

それ以降、本校の自然学校や修学旅行、運動会は、準備段階では指導しても、本番では児童にすべて任せて、教師は見守る形で実施している。修学旅行は、事前に旅行会社と児童との打ち合わせ会をもち、当日自分たちが困らないように取り組んだ。そのかいもあり、今年度も、しおりを見ながら予定どおりに活動が進み、教師が全く指導をしなくても大丈夫という修学旅行が実施できた。

これらの取組を通して、いかにこれまで、教師が児童の学ぶ機会を奪っていたかを痛感した。教師の指示がなくなって初めて頭を使い始めた児童たち。現地のスタッフや添乗員などの力を借りながら、自分たちでやり切ったことで芽生える自信や達成感。それが自律・自立へつながっているのだと感じている。

## 6 取組の課題

### (1) 校長の覚悟

チーム担任制を進める際、一番大きな課題は、「校長の覚悟」だと感じる。今まで続いてきたシステムを変更することへの教職員の拒否反応は、想像以上に大きいものがあった。しかし、学級担任制が原因で傷ついている児童の実態を見るとき、我慢させていて良いはずがない。すぐにも、何とかして救わなければならない。チーム担任制の必要性を校長自身が深く理解し、教職員を1つにまとめ、同じ目的に向かって進んでいく



その覚悟があるか。チーム担任制を成功させられるかどうかは、校長の覚悟にかかっている。

## (2) 教師の意識改革

この取組を進めるにあたっての、もう1つの大きな課題は、「教師の意識」である。日本の小学校でこれまで続いてきた学級担任制。1人の教師と子どもたちで深い人間関係を育み、学習だけでなく、生きていくためのさまざまな力を身に付けさせてきた。しかし、保護者対応の増加や不当な要望等への対応に対するストレスは、校長である私たちが若手だった頃と現在の教育現場の現状とは全く違う。学級担任1人に責任を負わせるのではなく、それぞれが自分の分担する役割に責任をもち、学級全体のことはチームとして責任をもつ。「自分の学級さえ良ければいい」といった狭い視野ではなく、「学校全体」のことを考えられる広い視野をもたなければならない。そういう教師の意識改革こそ、大きな課題であると感じている。そして、この課題さえクリアできれば、多くの学校においてチーム担任制を導入することは可能であるとする。

## (3) 保護者、児童からの信頼を得るために

ここまで3回のアンケート調査を実施したが、必ず一定数(約2割)反対意見は存在する。そして、自分の子どもの特性などを考えて、「やはり1人の学級担任のほうが、自分の子どもは安定する」等の意見があることはやむを得ない。ただ、チーム担任制に取り組み始めてから、保護者からの苦情は1件もない。最初は不安で、「どちらとも言えない」だった保護者も、2年目に入り、落ち着いた児童の様子やチーム担任制への安心感が増し、肯定的な意見が増えてきていることがアンケート結果に表れている。保護者の安心を得るためには、地道に取組を進め、信頼を勝ち取っていくしかないと思う。

## 7 | おわりに

「学級崩壊から児童を守るため」、これが本校で「チーム担任制」を導入した理由である。私が新任の中学校教師として働き始めた1980年代、全国の中学校では校内暴力が巻き起こり、学級崩壊が相次いでいた。命の危険も感じながら、毎日勤務していたことを思い出す。それが今は、小学校低学年で学級崩壊が起こる時代である。

チーム担任制の取組を進める中で、教師や保護者の中から、教科担任制だけでも複数の教師で関わり多面的な理解をすることで学級崩壊を防げるのではないか、という意見があった。しかし教科担任制では学級崩壊は防げない。これは確かである。なぜなら、学級崩壊が最初に起こったのは教科担任制を実施している中学校だからだ。考えている以上に学級担任の影響力は大きいのだ。だからこそ、たとえ教科担任制であっても、学級崩壊は起こるのである。1人の教師が担任として関わり続ける限り、一度学級担任と児童との関係性が壊れてしまった場合、改善することは非常に難しい。チーム担任制は、1つの学級に対して複数人の教師が担任として関わりをもてるという点で、学級崩壊の解決策の1つになり得る。そして、教職員の休職・退職者増加への解決にもつながると考える。

今年度2学期末から、1、2年生もチーム担任制を導入している。児童や保護者からも大きな問題は出ず、保護者アンケートでは、肯定的な意見が8割を超え、高い評価を得ている(図12)。教師からは、高学年と同様に、担任教師の精神的負担が軽減される効果が大きいという。

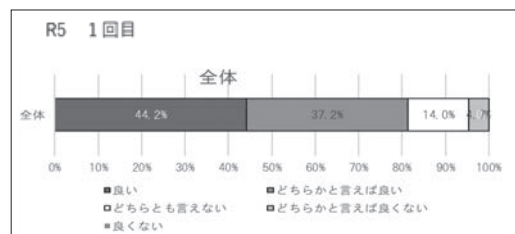


図12 1、2年生保護者アンケート結果

今年度の取組を検証し、来年度はさらに効果的な取組へと進化させていきたいと考えている。

先日、昨年度この取組に反対していた教師と話す機会があり、その教師の2人の孫の話題になった。今、どちらの孫の学級も学級崩壊になり、その学級の児童たちがとても不安定になっているとのことだった。そして「今になって、校長先生の話されていたこと（チーム担任制の必要性）が分かった」と話された。教師の立場では見えないことも、保護者の立場となって初めて見えることがある。

これからの時代を生きていく子どもたちが、安心して学習できる学校へ。学校、家庭、地域が一体となって子どもたちを支え、教師もやりがいをもって、それぞれの強みを活かした、本当の「チームとしての学校」を目指して、さらに取り組んでいきたいと思う。



写真2 6年生と保護者が制作した150周年記念壁画

報告書（平成17年3月）

- <sup>5</sup> 「学級経営研究会では『学級』を1年間という『時間』と、教室という『場』においてつくり上げられるものと捉えた。そのため、既存の強固なものが壊れるという意味合いが強い『学級崩壊』という言葉は使わずに、『学級がうまく機能しない状態』という表現を使い、問題状況の構造的な分析や理解に努めた。」小松郁夫「学級経営をめぐる問題の現状とその対応」（国立教育研究所広報124号、平成12年1月）

#### 【注】

- <sup>1</sup> 文部科学省「令和3年度公立学校教職員の人事行政状況調査について」（令和5年1月16日更新）
- <sup>2</sup> 文部科学省「令和4年度学校教員統計中間報告」（令和5年7月28日）
- <sup>3</sup> 文部科学省「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」（平成27年12月21日）
- <sup>4</sup> 国立教育政策研究所生徒指導研究センター「学級運営等の在り方についての調査研究」